華僑・華人と中華網

移民・交易・送金ネットワークの構造と展開

濱下武志

本會由
月
日請連
日開
備有會
份出高
水低各
安天命
如有會
仔走路
會青換
會一半

蓋聞義會之設始自　龎公原以緩急相濟利息悉
均此君子生財之大道也茲蒙　親友過愛相帮一
會踵其法而行之務以始終矢懷固非獨一人受益
亦未嘗不感　列公之高誼也謹將規條開列於左
一議邀親友　住連本身　份每份先捐
銀　共銀　交首會先領會期
遞年　會以　月　日為期風雨不改遇閏
算到期首會預日具求通知以備辦銀兩屆期各
攜銀到會所供充當衆驗明即席清楚不得扣賬按
押與及私數推諉倘遇貴冗必要付親友代供代欽

岩波書店

華僑・華人と中華網

移民・交易・
送金ネットワークの
構造と展開

濱下武志

常州大学図書館
藏书章

岩波書店

濱下武志

1943年生まれ．東京大学文学部卒業，東京大学東洋文化研究所教授，京都大学東南アジア研究センター教授を経て，龍谷大学教授，中山大学(中国)アジア太平洋学院院長・教授，静岡県立大学グローバル地域センター副センター長・特任教授，東京大学名誉教授，香港大学名誉教授．そのほか，香港・中文大学，シンガポール大学などで客員教授を歴任．歴史学(中国社会経済史・東アジア経済史・東アジア華僑華人史)を専攻．

『中国近代経済史研究――清末海関財政と開港場市場圏』(1989年，汲古書院)

『近代中国の国際的契機――朝貢貿易システムと近代アジア』(1990年，東京大学出版会)

『香港――アジアのネットワーク都市』(1996年，ちくま新書)

『朝貢システムと近代アジア』(1997年，岩波書店)

『沖縄入門――アジアをつなぐ海域構想』(2000年，ちくま新書)

China, East Asia and the Global Economy: regional and historical Perspectires, Rootledge, 2008

『中国・東亜与全球経済――区域和歴史的視角』(北京)社会科学文献出版社，2009年

『世界史への問い』全10巻(1989-91年，岩波書店)，『アジアから考える』全7巻(1993-94年，東京大学出版会)，『地域の世界史』全12巻(1997-2000年，山川出版社)，『海のアジア』全6巻(2000-2001年，岩波書店)の編集委員を務める．

華僑・華人と中華網
―移民・交易・送金ネットワークの構造と展開

2013年11月27日　第1刷発行

著　者　濱下武志(はましたたけし)

発行者　岡本　厚

発行所　株式会社 岩波書店
〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
電話案内 03-5210-4000
http://www.iwanami.co.jp/

印刷・三陽社　カバー・半七印刷　製本・牧製本

© Takeshi Hamashita 2013
ISBN 978-4-00-025929-3　Printed in Japan

華僑・華人と中華網

まえがき——華僑・華人と中華網

華僑移民の歴史的展開は、これまで華僑・華人・華裔という三世代転換論によって議論されてきたと言える。すなわち、「華僑」は移民元の国籍を有しているものであり、「華人」は移民先で生まれた第二世代として、より現地化しており、現地に強い帰属意識を持つ世代である。そして「華裔」とは、第二世代の華人を前提として、そこからさらに移民・移動を企てる人々である。一九六〇年代頃までは、華僑という一語で表現されてきたが、一九六〇年代に東南アジアにおいてイギリス・オランダ・フランスなどの植民地が独立することによる華人の比重が高まったこともあり、華僑・華人という表現を以て、すべての海外移民を代表させてきたと言える。これらは、国籍と帰属意識をとおして特徴づけられた華僑・華人論である。

しかし現在の華人はこれまでの三世代論のなかの華人論とは異なる含意を持っていると思われる。たとえば、「華人世界」という場合には、事実『華人世界』という定期刊行物があるように、ここではむしろグローバル性を有する華人を指すものとして使われている。これまでのように現地に引き付けて理解されてきたような第二世代のナショナリズムの担い手となり、国家と結び付けられていた華人とは大いに異なっている。すなわち、華人世界というときの華人とは、むしろこれとは逆方向を示しており、世界さらにはグローバルに近い概念として生まれ変わっており、一九九〇年代以降はいわゆる新華僑と呼ばれる新たな移民潮流が加わり、この華人に引き付けた世界やグローバルは「中華」そのものともいうべき汎世界を含意している。したがって、これまでの華人世代のネットワークと華人世界のグローバル性とが結合し、両者が重層的に複合した世界として「中華網」「中華ネットワーク」と呼ぶに相応しい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

状況を示している。本書を通底する主題のひとつにこの「中華網」があり、この概念を本書の表題に用いた理由もここにある。また、この中華は、それがグローバルであることによって、あるいはそのように位置づけられることによって、一方ではこれまでの華人ナショナリズムが拡延されてグローバル化する側面を持つと同時に、他方では「世界市民」としての華人を形成する可能性を包含するという課題も提起している。あるいは少なくともそのような要素と可能性を強く伏在させているといえる。

ひとりひとりの「華僑」「華人」から見て、「華」であり同時に「僑」であるという結合は、現在ますます成り立ち難い状況にある。そこには、僑務政策の中でいわれる「融入(融合)」と「本土化(現地化)」が進んでおり、華(中華)+僑(僑寓・移民)の組み合わせはいわゆる華僑の数だけの多くの数に上るといえる。そして、これは移民先の現地における華僑政策と移民元の中国・台湾・香港などの移民政策・移民受け入れ政策と強く関連していた。

一九八〇年代以降のいわゆる改革開放の時期になると、華僑問題は大きな変化を見せた。海外華僑が、変化する中国・東アジアに注目し始めただけではなく、改革開放政策そのものがその初期には華僑・華人の力に負うところが多かったからである。この動きは、一九八〇年代半ばに急速に拡大した東南沿海地域を中心とするいわゆる郷鎮企業の動きの中にも反映していた。海外華僑・華人からの企業への投資や、海外の華人企業そのものが沿海地域に移転したり、国内の経済活動に引き付けられた、いわゆる帰国華僑が増大した。このような状況の中で、一方ではグローバル化する華人の動きと同時に、僑郷と呼ばれる華僑の故郷の変化が注目された。このような経済的変化にともなう沿海地域の都市化の動きに参加する中で、帰国華僑ならびに移民先との関係も強まっている。

このような状況を考えるとき、もし、これまでの文脈で華僑・華人問題として課題設定をする場合には、現実の実

在とはますますかけ離れていくことになりはしないだろうか。移民や移動という契機を持つ人々が、多様な現地化過程の中にいるということは、華僑・華人研究に対しても、概念や研究対象の再検討、研究方法ならびに研究方向に関してあらたな課題設定が求められていると考えられる。

本書は一九七〇年代後半から二〇一〇年代初めまでのおよそ三〇年間に及ぶ、中国東南沿岸、香港、東南アジアとりわけマレーシア・シンガポール・タイにおける訪問調査並びに資料調査の過程で発表した論文を中心とし、それらを改訂しつつ新たな文章を加えて編集したものである。刊行の契機は、これまでの華僑・華人に関する歴史サイクルがこの三〇年間において一巡したと感じ、これからのいわゆる新華僑の研究とは一線を画する切り替えが必要であると感じたからである。

他方、いまひとつ本書の各章に跨って特徴的な点は、華僑・華人に関する分析をネットワーク概念を多用することによって分析しようとしていることである。分析の過程で使用されるネットワーク概念が含む範囲は、現在では大きく広がっており、今後一方ではこのネットワーク概念をより分析的にまた機能的に検証可能な方法的視点としていくことが求められていると同時に、さらに概念的に位置づけ、制度・組織・契約などにおけるネットワーク概念の応用と比較などを進める必要があると考えられる。そこにおける基本的な視点は、従来不確定・不安定・過渡的・融通無碍など、否定的なまた消極的な側面が強調されてきたことに対して、グローバル化した世界ならびに社会において、ネットワークならびにネットワーク化が発揮する作用は、むしろ、組織や制度などよりもより一層関係性を形成・維持したり、時には強制するという作用を発揮する場合があるという条件が増大することが予想される。その意味で、ネットワークは、ある概念や関係性の体系として、相対的に独自の役割を果たすことがより本格的に検討される必要

があると考えられる。

本書の方法的な試みとして、このネットワークという表現を多面的に使用していることを挙げることができる。交通概念からのネットワーク論、非制度・非組織ネットワーク、有中心・無中心ネットワークなど、華僑・華人の移民や移動、社会的なつながりを基本的にネットワークという概念で検討しようとしている点である。

第一に、交通概念 transportation としてのネットワークは、道路・鉄道・航運などのものやひとが動く手段としての交通・運輸である。第二に、情報の往来 communication に関するネットワークである。電信電話や郵便などによる情報の往来のネットワークは、情報化社会においてはより重要な役割を果たしている。第三には、モノや人の移動 circulation に関連するネットワークがある。ものの移動・流通やひとの移動・移民に関するネットワークである。第四に、社会的な紐帯とその変容 transformation を意味するネットワークである。ネットワーク概念が、社会紐帯における拡大された家族ネットワークとして機能する、ある意味ではネットワーク概念が導かれた社会的資源の交換・交渉という特徴を示すものである。ここでは、信用についての検討も不可欠であろう。併せて、ネットワーク概念が単独で議論されたり、あるいはそれが組織との比較による対比的な特徴としてのみ強調されたりすることはネットワークを議論する本来の枠組みとは異なることに留意したい。さらに、ネットワークによる検討の特徴として、華僑・華人の企業経営における、また資金供給におけるネットワーク性に注目している。とりわけ金融問題の領域におけるネットワークに注目している点は、金融研究の方法的な問題のほかに、華僑・華人研究を華僑送金問題として取り組んできたことに起因している。他方では、ネットワークを補完する概念、あるいは、より理念的な側面を表す概念として、連結性・関連性を示す connectivity や nexus という概念の活用も可能であろう。

目　次

まえがき——華僑・華人と中華網

序　章　アジア研究のなかの華僑研究 ——— 1

はじめに——華僑研究の視点　1

一　国民経済と広域地域　2

二　地球化と地方化のなかの華僑研究　4

三　ネットワークの諸問題　9

おわりに　14

総　論　華僑・華人のアイデンティティ ——— 17

はじめに　17

一　華僑・華人・華裔　18

二　「華僑的状況」の増大　22

三　新華僑状況と現代中国認識　29

四　「華僑」の社会倫理と文化価値　33

おわりに　39

第一章　華僑・華人ネットワークの特質——インド系と華人系の比較から　45

はじめに——移民問題と現代世界　45
一　移民研究の新たな課題　47
二　移民と本国送金に見るインド系と華人系の比較　50
三　ネットワークとその原理　51
四　交差するネットワークの歴史的展開　55
五　本国送金と金融ネットワーク　57
六　交差するネットワークの諸類型と相互関係　72
おわりに——非制度的ネットワークの活発化　76

第二章　移民と商業ネットワーク——潮州グループのタイ移民の事例から　81

はじめに　81
一　歴史的背景　82
二　タイの華人グループ　87

三　潮州系華人組織　94
四　潮州における人口と移民　98
五　広域商業圏の形成　103
六　華僑送金機関（批業）の発達　105
おわりに　113

第三章　華僑経済と民間金融——資金の内部流通と外部ネットワーク　117
はじめに——マレーシア・シンガポール華人社会における「合会」と「銀信匯兌」　117
一　庶民金融のなかの資金調達と投資——合会　119
二　合会、合股、聯号と華僑・華人経済　131
三　資金の外部ネットワーク　南洋華僑送金——僑匯の経済要因・社会要因・文化要因　135
四　華僑送金　138
五　送金の具体的手続き　140
六　銀信局による為替送金の方法　144
おわりに　149

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第四章　朝貢システムのなかの商業移民
——一九世紀後半の朝鮮をめぐる華僑の金融ネットワーク　153
はじめに　153
一　清国の朝鮮への影響拡大と広東商人　155
二　清国—朝鮮間貿易にあらわれた米と金の輸出入　157
三　清国商人の優勢　161
四　山西票号の東アジア・ネットワーク　165
おわりに　171

第五章　帝国＝植民地関係のなかの華僑
——一九三〇—四〇年代日本の南洋経済政策　177
一　華僑・華人問題——日本と南洋のかかわりから　177
二　戦前期の華僑・華人問題関係文献　180
三　華僑経済力調査　187
四　主題別華僑調査の動向　191
五　機関別・研究者別にみた華僑調査研究の特徴　196
おわりに——戦前と戦後の連続と断絶　201

付録資料　華僑調査関係文献　209

第六章　香港―シンガポール関係と移民送金ネットワーク――217
はじめに――アジア金融市場のなかの華僑送金ネットワーク　217
一　アジアへの銀流入と銀問題　218
二　潮州―香港―シンガポール間の商業ネットワーク　224
三　国際銀行のアジア参入――香港上海銀行の戦略と香港問題　228
四　華人ネットワーク・ビジネス　232
五　香港―シンガポール関係研究の諸課題　234
おわりに――ネットワーク論、海域論、広域地域論に向けて　241

第七章　改革開放経済のなかの「華僑的状況」――――249
――地域社会の流動と華南の華僑資本
はじめに――民間・地域・歴史　249
一　「以工補農」と「離土不離郷」　251
二　統計から見た郷鎮企業の展開　255
三　関連諸政策　258
四　郷鎮企業と地域経済模式（モデル）　262
五　郷鎮企業と地方市場　265
おわりに――幾つかの課題　269

第八章　華僑・華人・Chinese の国際移動と華人世界 ―― 273
はじめに――課題と視点　273
一　華僑・華人研究の現在　275
二　Chinese の国際移動の歴史的概観　276
三　国際移動を生み出した「上位地域秩序」の歴史展開　278
四　Chinese の国際移動の重層化――「グローバル」と「ナショナル」　281
五　国際移動を促進する華僑送金（僑批業）のグローカル歴史モデル　283
おわりに――Chinese の国際移動の中の新たな課題　287

第九章　華僑・華人研究の現在 ―― 291
――グローバルとローカルの間で
はじめに　291
一　新移民研究の課題　293
二　中国の経済発展の画期と華僑・華人ネットワークの変化　296
三　分析の枠組みから行動の規範への展開　301
四　今後のいくつかの課題――アメリカ問題、帰化・国籍問題　305
おわりに――ライフヒストリーとしての華僑・華人体験の伝承　310

終　章　中華網の歴史サイクル
——華僑・華人問題からみた地域主義と中華性　315
はじめに　315
一　地域主義を越える問題枠組み　316
二　一九九七年香港返還とアジア　319
三　大民族主義と小民族主義　320
四　東アジアにおける国家形成の契機　322
五　地域主義の国家化・民族化　324
おわりに——香港をめぐる複合的後背地関係の形成　325
あとがき　329

序章　アジア研究のなかの華僑研究

はじめに――華僑研究の視点

アジア経済史研究を中心としながらも、より広く、アジアの政治・経済・社会・文化の変化のなかで、華僑や印僑など移民・移動の問題を考える場合、どのような研究課題があるであろうか。そしてまたその研究方法は、そのテーマに固有のものがあるであろうか。例えばアジア経済論あるいはアジア経済史という場合、一般的には、それをただちに各国別に分割して、アジアという一応地理的な空間の中にある国を各々検討する場合が多いかもしれない。そしてそれを加算していくとアジア経済になるという考え方、分析の方法、あるいは経済論モデルが、これまでは主要な方法であった。

華僑や印僑の研究においても、これに似て、各国別や地域別における華僑や印僑の研究があり、それらの総和が華僑研究・印僑研究となってきたといっても過言ではない。

しかし、試みられるべき研究の視角や問題の切り口は、仮にアジアとして問題をたてた時、そこがなんらかの形の一つのまとまりを持つことを想定している。もちろんそこでは、まとまりの強さも多様であり、あるいはまとまりも一つとは限らず、幾つかのまとまりに分かれる場合も考えられる。また幾つかのまとまりの相互間の関係によって、そのまとまりの性格も違ってくるということがあり得る。しかし少なくとも、アジア、あるいは東アジアという地域世界を考え、あるいは東南アジアという地域世界を想定した時には、そこが相対的に独自の一つのまとまりとしての

政治的・経済的・社会的・文化的な、また総合的な動きを持つことを前提とした視点が含意されている。

したがって、最初から、例えば東アジア経済史を考えるとき、日本史があり、朝鮮史があり、中国史があるのではなく、日朝中の相互関係のなかで、どのようなそれぞれの役割分担や、あるいは共通する特徴が、全体として、また各々の構成要素として作られてきたのかという視点から捉えようとする。最初に国というところから発想するのではなく、国家もより大きな地域の内部要因として考えてみるということでなければ、アジアやアジア経済へのアプローチとは言えないであろう。華僑研究も、すぐれてこの視点を共有していると言える。

一　国民経済と広域地域

国民経済の歴史性

この視点はヨーロッパ経済と言う時も同様である。例えば一九九九年一月からはなばなしくユーロが登場したが、この背景をどのレベルで捉えるかによって評価も異なってくる。これまでヨーロッパ経済史研究は、イギリス経済史、ドイツ経済史、フランス経済史、イタリア経済史という形で、各国別に縦割りにされ、それらの総和としてヨーロッパが構想されてきたと思われる。これは一面では極めて自然なアプローチであると言える。なぜならば、一八世紀以降のいわゆる近代国家の形成過程は、主権国家の下で国民経済というまとまりを作り、その下で統一的な通貨圏が主権国家に付随するものとして、議論されてきたからである。したがって、経済の主要な要素が国家という枠の中で機能し、位置づけられてきた。圧倒的に多くの経済モデルは、国民経済モデルとして、ＧＮＰやＧＤＰとして、個人の所得もやはり国民経済の枠で問題が考えられてきた。統計を示すstatisticsは国家stateに淵源している。

一九九九年、ＥＵにおいて統一通貨が追求されるという事態を考える時、各国経済の総和という視点から、ヨーロ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com